

# 聴覚障害教員による聴覚障害理解教育プログラム実践の試み

小学校 4 学年 総合的な学習の時間「わたしたちにできること」の実践から

石塚 篤史

大鹿 綾

（東京都練馬区立大泉第三小学校） （東京学芸大学特別支援科学講座）

KEY WORDS: 聴覚障害教員 聴覚障害理解教育

### （目的）

文部科学省（2012）「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」には、「児童生徒等にとって、障害のある教職員が身近にいることは、障害のある人に対する知識が深まるとともに、ロールモデルとなるなどの効果が期待される。」とある。小学校に勤務する聴覚障害教員である筆者が聴覚障害理解教育プログラムの立案、実践をすることでロールモデルとしての役割を果たすことができるとともに、自身の障害と配慮すべき諸事項について、児童に向けて啓発することで、共生社会の形成に向けての理解を広げることができるのではないかと考えた。そこで本研究では、小学校 4 学年の通常学級を対象にした聴覚障害理解教育プログラムを立案、実践し、聴覚障害当事者である筆者がロールモデル的な役割を担うことで障害に対しての理解につながったかどうか、障害のあるものないものそれぞれが対等な立場で、個人の違いを認め合う気持ちを育むことができたかを明らかにすることを目的とした。

### （方法）

- (1)対象：東京都公立小学校 4 学年 23 名を対象にした。（研究の公表に関して、当該学校長の承諾を受けている。）
- (2)手続き：総合的な学習の時間における全 3 時間の聴覚障害理解教育プログラム(table1)を立案し、検証授業を行った。
- 単元名 わたしたちにできること
- 単元の目標 聴覚障害を中心に障害のある人に対する知識を深め、障害のあるものないものそれぞれが対等な立場で個人の違いを認め合う気持ちを育てる。

Table1 聴覚障害理解教育プログラムの主な内容

時	主な学習内容
1	・もし聴覚に障害のある転入生が入ってきたら、どんなことを考えるかという課題を提示し、聴覚障害者とのかわり方について考える。 ・聴覚障害者の聞こえ方のデモ音源を実際に聞き、聴覚障害者の困り感について気づく。
2	・難聴体験から聴覚障害者と聴者の両方の体験をし、会話においてどのようなことが困るのか、双方の心理的な困り感からそれぞれ考える。 ・体験を踏まえ、聴覚障害者と聴者双方が円滑にコミュニケーションをとる方法を考える。
3	・前時で考えたコミュニケーション方法をもとに、もう一度難聴体験をする。 ・聴覚障害者と共に仲良く生活していくにはどんなことが必要か考える。

検証授業における児童のワークシート内での記述をテキストマイニングソフトの共起ネットワーク図を用い、使用されている語の出現頻度や複数の語の共起関係を可視化して分析することで、児童の反応の全体的な傾向を把握し、障害に対しての理解につながったかどうか、障害のあるもの・ない者それぞれが対等な立場で個人の違いを認め合う気持ちを育むことができたかについて分析・考察した。

### （結果）

第 1 時では、聴覚障害者とのかかわることについて、児童

から、「手話で（話して）仲良くなりたい。」という意見がある一方で、「友達になるのは難しい。」といった意見が見られた (Fig. 1)。

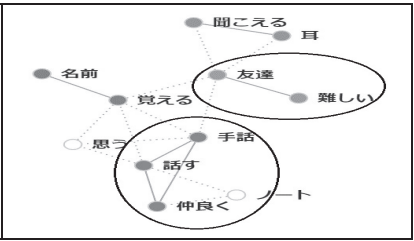


Fig. 1 第 1 時の児童の反応

第 2 時の難聴体験では聴覚障害者と聴者の両者の体験を交代して行った。聴覚障害者役からは、「なんて言っているのかわからないし、仲間はずれにされているみたいで悲しい」、聴者役からは「自分は普通にしゃべっているのに何言っているのって顔をしていて、何回もしゃべっても聞こえなくて話が進まない。」などの感想から、双方の立場からそれぞれの戸惑いと、困り感に気付いている様子が伺えた。

第 3 時では第 2 時の体験を踏まえ、児童から「手話や筆談、大きな口を開けてジェスチャーをつけて話す。」や、「耳が聞こえない人と目が合ったら、無視をしないでやさしく声をかけてあげたり、自然に会話できるように心がけたりする。」という感想が見られた。このような児童の反応から、障害に対しての理解を深め、対等な立場で違いを認め合おうとする態度が児童の中に育まれている様子が示された (Fig. 2)。

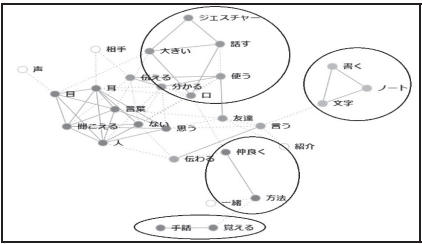


Fig. 2 第 3 時の児童の反応

### （考察）

聴覚障害理解教育プログラム全体を通して聴覚障害教員である筆者が日々の生活でどのようなことで具体的に困り、そして障害をどう受け止めていったのかを率直に語りかけたことで障害のある人に対する知識を深めるのに有効であったと考える。また難聴体験では、ただ聞こえない体験のみをするだけではなく、聴覚障害者役と聴者役の両者の体験を行ったことで双方の立場の困り感を体感させる上で有効であった。さらに両者の困り感を軽減するための解決方法を話し合わせたことで障害のある者・ない者が対等な立場で違いを認め合おうとする態度の形成に繋がったと考察した。

（文献）文部科学省(2012)共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）。

(ISHIDUKA Atsushi, OHSHIKA aya)